
星野道夫(1952~1996)『旅をする木』文春文庫 1999年

〈最近のニュースから〉

2026年3月19日の日米首脳会談で、高市首相は、米国・イスラエルによるイラン攻撃に伴うエネルギー供給リスクへの対応として、アラスカ北部産原油の生産拡大に向けた協力で合意したと報じられた。化石燃料のほとんどを海外から輸入する日本は、原油の約9割を中東に依存しており、その代替調達先としてアラスカ北部産原油が名指された。

寡聞にして知らなかったのだが、Wikipedia を調べてみると、アラスカを南北に縦断する石油パイプライン(Trans-Alaska Pipeline System)は、総延長1300km、北部の油田地帯プルドーベイと南部の港バルディーズを結び、1974年着工、1977年に完成している。そして、このパイプは、全て日本製(当時の新日本製鐵)なのだという。(Wikipedia をたどれば、「新日本製鐵は、官営八幡製鐵所を中心に複数の製鉄業者が合同して1934年(昭和9年)に発足した日本製鐵(日鉄)が歴史上の前身にあたる」という。歴史の教科書で習うように、八幡製鐵所は「殖産興業・富国強兵」の国策に基づき、日本の近代化の中核を担った製鐵所である。)

著者は、アラスカの油田開発を憂慮していた。(以下、傍線は山口)

私は、厳しい自然条件の中でひたむきに生きようとする、アラスカの生命の様が好きである。それは、強さと脆さを秘めた、緊張感のある自然なのだ。

一滴の雨水もむだにせず、少々の水気と地表の暖かみだけで生きる地衣類。苛酷な極北のツンドラに咲こうとする小さな花。マイナス五十度まで下がる酷寒の冬を、雪の穴ぐらで何も食べずにただひたすら春を待つハイイログマ。寒風吹きすさぶ雪原に産み落とされ、必死に立ち上がりながら生きようとするカリブーの子……それは計り知れない強さだ。しかし全体としての生態系は、微妙なバランスで保たれた本当に脆い自然なのである。その食物連鎖の単純さに代表されるように、地球上で最も傷つきやすい自然だろう。その一つの鎖が途切れても、全体に回復することができない破局を与えてしまう。

カリブーの主要食物である地衣類は、公害基準のバロメーターになるほど大気汚染に弱い。その生長速度はきわめて遅く、一度破壊されると、わずか数センチの大きさに再生するのに五十~百年かかるといわれている。これは、生存のためにカリブーが広大な土地を必要とする一つの大きな理由だろう。

北極圏で始まろうとしている巨大な油田開発は、カリブーがきびしい冬を乗り越えてゆく鍵である地衣類に、どれだけの影響を与えてゆくのだろうか。そしてそこから派生してゆくものは、北極圏の生態系全体にどのような変化をもたらすのだろうか。

[[極北の放浪者』『マザーネイチャーズ』1990年春号より]

現在、ベーリング海から北極海にかけて、沿岸油田開発の計画が進められている。水中に伝わっていく騒音は、聴力にすぐれたクジラの移動ルートにどんな影響を与えていくのだろうか。そこから確実に流れていくであろう油は、アザランをはじめ多くの海洋動物の生存に関わってこないだろうか。

[[海洋動物たちに影響をおよぼす沿岸油田開発』『ヤマケイグラフィック』1985年秋号より]

シロクマの生態学的研究が始められたのもこの数十年である。子どものころ、私が思いをめぐらしたこの生きものの存在は、今の時代、どのような意味を持つのだろう。彼らを守ることは私たち人間自身が生きのびてゆくかどうかの象徴にさえ思えてくる。

なぜなら、PCB(ポリ塩化ビフェニール)を始めとする科学物質の汚染が、北の果てに生きるシロクマの体内にも現れ始め、静かに警告を発しつつけているからである。

「はるかなる氷原「北極の王」シロクマの親子を追う[『アサヒグラフ』1993年2月12月号より]」

斎藤幸平が『人新世の「資本論」』(集英社新書)で指摘していた「犠牲に基づく帝国的生活様式」が、ここでは日本とアラスカの自然の関係に見い出せる。以下の“先進国”を“日本”、“グローバル・ノース”を“アラスカの自然、動物”と置き換えても事態は同様だ。

ドイツの社会学者ウルリッヒ・ブラントとマルクス・ヴィッセンは、グローバル・サウスからの資源やエネルギーの収奪に基づいた先進国のライフスタイルを「帝国的生活様式」(imperiale Lebensweise)と呼んでいる。

帝国的生活様式とは要するに、グローバル・ノースにおける大量生産・大量消費型の社会のことだ。それは先進国に暮らす私たちにとっては、豊かな生活を実現してくれる。その結果、帝国的生活様式は望ましく、魅力的なものとして受け入れられている。だが、その裏では、グローバル・サウスの地域や社会集団から収奪し、さらには私たちの豊かな生活の代償を押しつける構造が存在するのである。

(斎藤幸平『人新世の「資本論」(集英社新書)』)

トミー・オレンジが『ゼア・ゼア』(五月書房新社)で描いた「奪い取って奪い取って奪い取って奪い取った人々」という言葉が、必ずしも白人のみに向けられたものではないことに思い至る。

目下進行中の事態は、私たちの生活が、相対的には豊かさを実現したとしても、それを実感するには、やましき、うしろめたさを募らせる、“アラスカの自然や動物たちの犠牲に基づく「帝国的生活様式」”となりはしないか、という問いに立ち戻らせる。

宮沢賢治の『氷河鼠の毛皮』(『ポラーノの広場』新潮文庫所収)に、イーハトヴの北方ベーリングへ、賭け事のための猟に出かける、赤い顔の肥った紳士“タイチ”という男が登場する。

「その人は毛皮を一杯に着込んで、二人前の席をとり、アラスカ金の大きな指輪をはめ、十連発のぴかぴかする素敵な鉄砲を持っていかにも元気そう」彼は、黒狐の毛皮九百枚を持ってきてみせるという賭けをしたという。

ところが、列車はベーリングへの途上で、ピストルを持った熊たちの襲撃に遭う。「こいつがイーハトヴのタイチだ。ふらちなやつだ。イーハトヴの冬の着物の上にねラッコ裏の内外套と海狸の中外套と黒狐裏表の外外套を着ようというんだ。おまけにパテント外套と氷河鼠の頸のこの毛皮だけでこさえた上着も着ようというやつだ。これから黒狐の毛皮九百枚とるとぬかすんだ、叩き起こせ。」熊たちは、タイチの動物たちへの仕打ちを糾弾する。ところが、このテロ行為は、列車に乗車していた帆布の上着の青年によって防がれることになる。

「おい、熊ども。きさまらのしたことは尤もだ。けれどもなおれたちだって仕方ない。生きているにはきものも着なけあいけないんだ。おまえたちが魚をとるようなもんだぜ。けれどもあんまり無法なことはこれから気を付けるように云うから今度はゆるして呉れ。(略)」

今からちょうど100年ほど前(1922年4月岩手毎日新聞初出)の童話にもかかわらず、まるで賢治が現代を見透しているように、この物語が現代に教えるものは少なくない。

1 消えてしまったものがたり (傍線は山口)

今のインディアンの村に行けば、飾りもののようなトーテムポールを見ることはできる。だが、人々の暮らしはあまりにも変わってしまっていた。たとえ形は同じでも、トーテムポールは何も語りかけてはこない。それを刻んだ人々の心の中で、ものがたりが消えてしまっているからだ。クジラもクマもワシも、ずっと遠くへ行ってしまったのだ。 (p.124)

「トーテムポールを捜して」

この文章と、渡辺京二が『逝きし世の面影』で次のようにいうのは同じことだった。

異邦人たちが予感し、やがて目撃し証言することになった古き日本の死は、個々の制度や文物や景観の消滅にとどまらぬ、ひとつの全体的連関としての有機的生命、すなわちひとつの個性をもった文明の滅亡であった。(略)新たな図柄の一部として組み替えられた断片の残存を伝統と呼ぶのは、なんとむなしい錯覚だろう。 (p.12)

渡辺京二『逝きし世の面影』葦書房

トミー・オレンジは『ゼア・ゼア』で都市インディアンを描くなかで、これをインディアンの立場から描いていた。

インディアンみたいな格好をしている、とオーヴィルは思う。動物の皮と飾り紐、リボンと羽、骨で張りをつけた胸当て、それらに包まれた猫背。ひよろひよろの膝で立つ自分は、フェイク、コピー、衣装で遊ぶ子供だ (p.157)

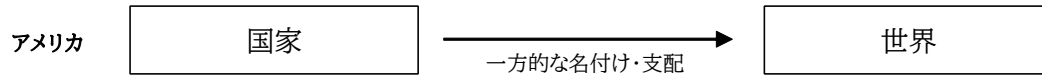
わたしたちは、ヒマラヤスギやセージや揚げパン[先住民のあたらしい伝統料理]のにおいよりもガスやうったばかりのコンクリートや燃えるゴムのにおいをよく知っている。それは伝統的ではない。ちょうど居留地が伝統的ではないように。かといってオリジナルなものなどなく、すべてはそれ以前に存在したのから生まれ、そうしたものはかつては無だった。すべてはあたらしく、すでに運命づけられている。わたしたちはバスや列車や車に乗り、コンクリートの平原を渡り、越え、その地下へもぐる。インディアンでいることは、大地へ帰ることではない。大地はいたるところにあってどこにもない。 (p.19)

トミー・オレンジ『ゼア・ゼア』五月書房新社

➡根扱ぎの近代、“大地から切り離された”(2026年1月10日のつつじ読書会 ポール・オースター『写字室の旅』)

アラスカは1867年、ロシアから買収され、1959年にアメリカの49番目の州となった。アメリカは、先住民の自然的空間を排除することで建国された国家である(西谷修『アメリカ異形の制度空間』)。

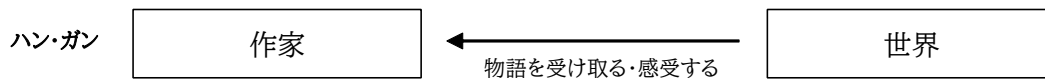
今を去ること24年前、ジョージ・W・ブッシュ大統領はイランを「**悪の枢軸**」と名指し、そして今年4月にはトランプ大統領が「今夜、一つの文明全体が消え去り、二度と元には戻らないだろう」と、イランを脅迫している。



一方的な名付けや支配が横行し、名前の向こうの世界が窒息させられる。かくして、ものがたりは消えてしまったのだ。

2 感受性

しかし他方で、一方的な名指し、支配ではなく、世界から物語を受け取る、という感受性がある。(アンチ・ロマン)



ハン・ガン『少年が来る』や『すべての、白いものたちの』は、自らの身を挺して世界を受苦し、そこから結晶した物語である。宮沢賢治(1896-1933)や、石牟礼道子(1927-2018)は、そのように言葉を紡いでいる。

わたしたちは、氷砂糖をほしくらるもたないでも、きれいにすきとほつた風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。

またわたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗(らしや)や、宝石いりのきものに、かはつてゐるのをたびたび見ました。わたくしは、さういふきれいなたべものやきものをすきです。

これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです。

ほんたうに、かしはばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかつたり、十一月の山の風のなかに、ふるへながら立つたりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを、わたくしはそのとほり書いたまでです。(後略)

(宮沢賢治『注文の多い料理店』序文)

➡足で吟ずる。『旅をする木』にも、同様の感受性が通底している。

そうして、この感受性が受け取ったものは何か。

3 編みあわせる物語

たとえば、「春の知らせ」(p.29)。妻の直子さんが妊娠するものの、流産の不安があるという。ここで著者は、六、七年前に目撃したカリブーの出産と、ベランダで頭から血を流していたベニヒワの出来事とを重ねている。群れのペースから遅れたカリブーは仔を産み、そのまま視界から消える。数日後、著者はその死骸を川岸で見つける。また、窓ガラスに衝突したベニヒワを一度家の中に運び入れるも、その後ベランダに戻してしまう。

著者は次のように書いている。

カリブーの子どもが寒風吹きすさぶ雪原で生み落とされるのも、一羽のベニヒワがマイナス五〇度の寒気の中でさえずるのも、そこに生命のもつ強さを感じます。けれども、自然はいつも、強さの裏に脆さを秘めています。そしてぼくが魅かれるのは、自然や生命のもつその脆さの方です。

日々生きているということは、あたりまえのことではなくて、実は奇跡的なことのような気がします。つきつめてゆけば、今自分の心臓が、ドク、ドクと動いていることさえそうです。人がこの世に生まれてくることにしてもまた同じです。妻が流産するかもしれないという不安の中で、やはり生命が内包する脆さをぼくは感じました。

「流産する時は、どうやってもしてしまうものよ。自然のことなんだから、それにまかせなさい」と言った妻の母親のひと言ほど、私たちを安心させてくれる言葉はありませんでした。

➡留意しなければならないのは、ここで著者は「人生はままならない(『闇の中の男』でいえば、このけったいな世界が転がっていくなか=As the weird world rolls on)」といて、出来合いの一般論をあてがっているのではないということだ(そうだとしたら、安心させてくれる、とはいわないはずだから)。そうではなく、自然や他者(あるいは別の箇所では先住民)の営為から受け取ったものを、人や自分自身の生のありようと重ね、言葉として編みあわせてゆく端緒を描いている。このような物語が本作のそこかしこに見い出せる。

まっさらな白紙の上に(あるいは白紙、更地としたうえで)書かれる物語ではなく、すでにそこにある糸と糸とで編みあわせる物語。

4 偶然性(偶然を受容する感受性)

著者は神話学者ジョセフ・キャンベル(1904-1987)の言葉を引いて、「聖なる場所」について次のように語っている。「オオカミ」(p.47) この聖なる場所こそ、物語が編みあわされる場所だろう。

「私たちには、時間という壁が消えて奇跡が現れる神聖な場所が必要だ。今朝の新聞になにが載っていたか、友達はだれなのか、だれに借りがあり、だれに貸しがあるのか、そんなことを一切忘れるような空間、ないしは一日のうちのひとときがなくてはならない。本来の自分、自分の将来の姿を純粋に経験し、引き出すことのできる場所だ。これは創造的な孵化場だ。はじめは何も起こりそうにもないが、もし自分の聖なる場所をもってそれを使うなら、いつか何かが起こるだろう。人は聖地を創り出すことによって、動植物を神話化することによって、その土地を自分のものにする。つまり、自分の住んでいる土地を霊的な意味の深い場所に変えるのだ。」(略)

きっと情報があふれるような世の中で生きているぼくたちは、そんな世界が存在していることも忘れてしまっているのでしょうね。

卑近な例だが、「人生設計(ライフプラン)」といった言葉が幅をきかせるように、近代は、時間や空間、世界を予見可能な情報のうちへと囲い込み、人間をその支配のもとに置いてきた。ところが、その過程で失われ、忘れられてしまうものがあるのだ。

情報は、ものを見えるようにするはずのものでありながら、かえってそれを見えなくさせてしまうことがある。すなわち、逆説的だが、あるものへの関心が、それ以外のものに関心の外へ追いやる(=死角をつくる)ことがある。(あるものを必然として優位にし、それ以外のものは取るに足らない偶然のものとして、劣位に置いてしまう)こうしたとき、偶然性を受容する感受性へと立ち戻ることを、著者は教えている。

ぼくたちが毎日を生きている同じ瞬間、もうひとつの時間が、確実に、ゆったりと流れている。日々の暮らしの中で、心の片隅にそのことを意識できるかどうか、それは、天と地の差ほど大きい。「もうひとつの時間」(p.123)

それゆえ、この感受性は、ものがたりが消えてしまった近代において、ひとつの福音となりうるのではないか。“消えたものがたり”や“滅びた文明”、“切り離された大地”も、それを受け取る感受性によって、なお触れることができる—そのことの福音として。

「トーテムポールを捜して」(p.129)では、(鳥山まこと『時の家』のように)神話が息を吹きかえすさまが描かれる。

雨はすっかり上がり、陽が射してきた。海辺の岩場に座ると、海面は夕暮れの陽光にキラキラと輝いていた。ぼくが腰かけた場所は、背もたれのあるとても座り心地のいい岩だった。その時、ほとんど確信に近い想像が満ちてきた。それは、遥かな昔、この岩に誰かが座り、こんなふうに夕暮れの海を見ていたに違いないということだった。

泣きじゃくる赤子を抱えた女があやしながら歩いている、漁から帰った男たちがカヌーを砂地に引き揚げている、若い男と女が戯れながらこの岩場に向かってやってくる…そんな風景が次から次へと頭の中に現れては消えていった。(略)

不意にどこからか木をたたく音が聞こえてきた。トン、トン、トン……が、あたりを見まわしても誰もいない。ふと見上げると、トーテムポールに一羽のキツツキが止まり、風化したハイイログマの顔をたたいている。いつのまにか森のなかから別のオジロジカが現れ、トーテムポールの間をさまよっている。神話は突然息を吹きかえし、この世界の創造主、ワタリガラスの苔むした顔がじっとぼくを見下ろしていた。

トウヒの種子が大木に成長し、その後、川の浸食により洪水にさらわれ、“旅をする木”となるように(「旅をする木」p.160)、“根扱ぎの近代”にも、まだ、可能性は残されているのかもしれない。

ぼくはかつてアラスカの未踏の原野に魅かれていた。セスナで何時間も飛び続けながら、まったく人気のない原野を驚嘆をもって見下ろしていたものだった。が、それは大きなまちが이었다。太古の昔から、アラスカの原野は足跡を残さぬ人々の物語で満ちているのだ。北方アジアから渡ってきたモンゴロイドが、この壮大な原野を越えていったことが、今、手にとるように想像できる。

[[「レイヴン、北へ」「森と氷河と鯨-ワタリガラスの伝説を求めて」-『家庭画報』1996年8月号より]